

令和２年度 京都府立南陽高等学校・附属中学校 学校経営計画（スクールマネジメントプラン）（計画段階）

学校経営方針（中期経営目標）	前年度の成果と課題	本年度学校経営の重点（短期経営目標）
校是の「進取」「敬愛」「雄健」の具現化を図り、地域から信頼される質の高い教育を実践することにより、自分の頭で考え、人と協働し、新たな価値を創造する人を育成する。そのために、 ① 自ら学ぶ姿勢を有し、自ら高みに挑戦する生徒を育て、学力の伸長を図る。 ② 特別活動等により、知・徳・体のバランスのとれた生徒の育成を図る。 ③ 生徒、教職員、保護者が一体となって、教育内容の質の向上を図る。 ④ 学研都市の資源を活用しながら、社会の一員としての自覚を持った生徒を育成し、文化学術研究を実践する学校づくりを進める。	◇ 生徒一人ひとりが目的意識を持って進路実現を果たした。今後は主体的・自立的に学習し挑戦する生徒の育成に向け、さらに教育力の向上を図る必要がある。 ◇ 難関大学進学に向けた組織体制の確立や学習・進路指導の展開により、生徒の進路実現に顕著な成果がみられた。 ◇ 学校行事の内容充実をはじめ、中・短期の海外留学や国際交流、ボランティア活動等、生徒の主体的な活動が定着しつつある。 ◇ 安心、安全な教育活動が行われるよう床改修や壁塗装等を行うことができた。今後も計画的かつ柔軟に施設管理の改善に努める。 ◇ 他校に先駆けて働き方改革に係る具体的な取組を進めてきた。今後も「働きやすさ」や「働きがい」を感じつつ、健康や精神的な充足感を得られる職場づくりを進める。	① 個に応じた学習内容の提供及び思考力・判断力・表現力を育成するための指導方法の工夫改善やＩＣＴの利活用等、学習指導の充実のための研究・実践を行う。 ② 難関大学進学に向けた取組の充実を図り、効果的な学習・進路指導を展開する。 ③ ４つの奨励（部活動、国際交流、ボランティア、コンテスト）を継続し、生徒の主体的・協働的な活動や社会参画の機会を増やす。 ④ 校内外連携のさらなる強化により、中高一貫教育の効果的な実施と計画的な準備を進める。 ⑤ 内外の評価を活用し、生徒一人一人を大切にし、個性や能力を伸ばせるよう、学習者起点による学校の魅力化を図る。 ⑥ ダイバーシティとワークライフバランスに係る具体的な取組を継続して進める。 ⑦ 小中高校の新学習指導要領の趣旨を踏まえた教育活動の準備を行う。

令和2年度 京都府立南陽高等学校・附属中学校学校経営計画(スクールマネジメントプラン)

評価領域 (分掌・教科領域)	重 点 目 標	具 体 的 方 策
教務部	教育課程、学習内容の充実のための研究・実践を行う。	I C Tを活用した個に応じた学習内容の提供（アダプティブラーニング）についてS S Pと協力し、研究・実践する。
		教科主任会議を充実させ、思考力・判断力・表現力を育成するための授業の実施に向けて、その指導方法の研究・実践を行う。
		6年間を見通した中高一貫教育及び次期学習指導要領を踏まえた教育課程・開講講座の研究・準備を行う。
	総合的な探究の時間について研究を行う。	総合的な探究の時間の実践を通して、今後の在り方や探究型授業の更なる研究を行う。
生徒指導部	生徒の主体的な活動を支える。	生徒主体の効率的かつ合理的な活動ができるよう部局顧問をはじめとする関係職員との連携を密にする。
		学校行事における生徒の活動を充実させると共に前年度におこなった地域との連携をさらに強化・拡充する。
		生徒会を中心とした校内外の活動を支援する。
	中高一貫校としての組織的な生徒指導を実践する。	全教職員体制で生徒の状況をきめ細かく観察し、生徒の心的変化を見逃さない体制作りをおこなう。
		学齢に応じた重層的かつ効果的な指導をおこなうと共に、協同的活動を支援する環境を構築する。
		生徒指導事案が発生した際は、関係教職員との連携を迅速におこなうとともに情報共有を円滑におこなう環境を構築する。

A:十分達成できている。 B:ほぼ達成できている。 C:達成できているとはいえない。 D:ほとんど達成できていない。

令和2年度 京都府立南陽高等学校・附属中学校学校経営計画(スクールマネジメントプラン)

評価領域 (分掌・教科領域)	重 点 目 標	具 体 的 方 策
進路指導部	個に応じた学習指導の充実のための計画・実践を行う。	長期休業中の進学講習の内容を教科・学年と調整し、学習者起点の講座選択を実施する等個々の生徒のニーズに対応した効果的な学習指導を実践する。
		土曜日の自習室開放を有効的に活用できるように学年と連携し、実施形態等を改善する。
		ICTを利用した主体的学習について実践・研究を深め、生徒の実態に応じた学習指導法を工夫・改善する。
	難関大学進学に向けた学習指導・進路指導の充実を図る。	難関大学進学に向けた学習意欲の向上を図り、主体的・自立的に学習に取り組む姿勢をもち、挑戦し学び続ける生徒を育成する。
		学年会や進路検討会（第3学年）をととして各学年団との連携をさらに深め、学習指導（個別入試含む）および進路指導の協働体制を強化する。
		附属中学校の生徒に対し、海外大学進学を視野に入れた進路指導体制を整える。
	各模擬試験データの共有と分析を行う。	各模擬試験データを進路指導部内で分析し、情報を教員間で共有化するとともに、部長会や教科主任会で以後の進路指導についての協議・提案を行う。
		FINEシステムやデジタルサービスの活用により、学級担任・教科担当者レベルでの分析を充実させ教員集団としての情報分析力を高める。
保健部	感染症予防のための取組を推し進める。	保健室だよりや生徒保健委員会発行“Well-being”を通じて啓発を図る。
		デジタルサイネージを活用し啓発を図る。
	特別な支援を要する生徒への組織的な対応を進める。	学年団、担任、教科担当等の連携を密にし、情報共有を図り、早期の対応にあたる。
		関係機関との連携を密にし生徒の実情の的確な把握に努めるとともに、個々に応じた指導計画を立てる。
	「自分たちの学習環境は自分たちで整える」という意識を高める。	日々の清掃を確実にを行うとともに、階段・トイレ・手洗い場の清掃をより丁寧に行い、校内の美化に努める。
		美化委員による清掃点検等の美化活動を定期的に行う。

A:十分達成できている。 B:ほぼ達成できている。 C:達成できているとはいえない。 D:ほとんど達成できていない。

令和2年度 京都府立南陽高等学校・附属中学校学校経営計画(スクールマネジメントプラン)

評価領域 (分掌・教科領域)	重 点 目 標	具 体 的 方 策
図書部	図書委員の活動がより充実したものになるように活動内容を見直す。	中学生の委員会活動を隔月開催し、読書啓発活動を促す。
		図書委員を通じて、一般生徒の図書館に対するニーズを探り、魅力ある図書館づくりの一助とする。また、図書委員会日より「F. I. B」を学期ごとに発行させる。
	教科との連携を深め、授業での図書館利用と、教科に関連した図書の貸し出しを増加させる。	授業でより有効な図書館利用ができるように、教科との情報交換を密にする。
		教科内容に関連した新書などの書籍を読ませるような仕掛けづくりを工夫する。
	読書活動を啓発し、生徒の目を広く社会に向けさせることにつなげる。	生徒による「ビブリオバトル」を実施し、府大会などの出場にもつなげる。また、これを個々人の読書のきっかけとする。
		多様なテーマの展示を行うために、「1 b o x」コーナーの作成をさまざまな教科の教員に依頼する。読書活動啓発のために、「フィブレット」を作成する。
企画研究部	生徒・教職員の人権意識と実践の深化を図る。	教職員の人権意識の深化と具体的実践を促すため、教職員の人権教育研修会を適宜実施する。
		生徒の人権意識を高め、地域の企業・団体等との連携強化や国際交流を通し、生徒自ら課題の発見・解決に取り組む活動を実施・企画する。
	情報発信においてICTの利活用を図り、その効果を検証する。	ホームページやSNS等を利活用し、動画などのツールを利用した情報発信を適宜企画・実施し、その効果を検証する。
		SNS等を利活用した広報活動の効果やプレゼンテーションについての研究・協議を適宜実施し、その効果を検証する。
事務部	主体的、積極的に学校運営に参画する。	事務の専門性を生かしつつ、効果的な学校運営が行われるよう各部と調整しながら事務を進める。
	校内の安心、安全、美化を推進する。	危険箇所を早期発見するため、月1回点検を実施し、計画的に着手すると共に、柔軟に施設管理の改善をする。

A:十分達成できている。 B:ほぼ達成できている。 C:達成できているとはいえない。 D:ほとんど達成できていない。

令和2年度 京都府立南陽高等学校・附属中学校学校経営計画(スクールマネジメントプラン)

評価領域 (分掌・教科領域)	重 点 目 標	具 体 的 方 策
第1学年部	高校生としての自覚を持ち、自立した行動がとれるように、しっかりとした生活習慣を身につけさせる。	すすんで挨拶をする、身だしなみを整える、ルールやマナーを大切にするといった基本的な行動を日常的に促す。
		共有空間である教室や施設をきれいに使用し、自らが良好な学習環境を作り出す意識を持たせる。
		日々メモや記録とすることで、高校生活を計画的に取り組むように自己管理につとめさせる。
	より高い目標に向かって着実かつ主体的に学習する姿勢を身につけさせる。	予習・授業・復習のサイクルを実践できるように、教科担当と学年団が連携して生徒の学習を支える。
		適宜面談を行い、生徒の自己理解を深めさせるとともに進路に対する意識を高める。
		進路指導部と連携しさまざまな情報を生徒に提供し、将来に対する展望を持たせる。
	校内行事や対外活動に積極的に参加させ、いろいろな人、集団との関わりの中で人間的成長を促す。	文化祭、体育祭、学年行事等に自主的に取り組みせ、仲間との信頼関係を深めさせる。
		部活動や国際交流、ボランティアやコンテストへの参加を奨励し、活動の場を広げられるようにする。
		さまざまな集団活動の基本には、人権の尊重があることを日々意識させる。
第2学年部	高校生としての自立した生活習慣を確立させる。	挨拶の励行と清掃の徹底を行うとともに、SHRをはじめとして機会あるごとに、ルールの遵守や他者を思いやる心の大切さを語りかける。
		生活・学習記録表等の適切な活用を通じて、自己の生活を振り返り改善する自己管理の力をつけさせる。
	学習に主体的に取り組む姿勢を身につけさせるとともに、進路への意識を高めさせる。	授業を大切にさせるとともに、講習や希望制の模試の受験を積極的に勧め、さらに発展的な学習に向かわせる。
		ポートフォリオの活用、学期ごとの面談等を通じて、自分なりの進路目標を設定させる。
	学校行事等を通じて生徒それぞれの活躍の場を広げさせる。	自分たちで行事を企画・実行させる機会を作り、互いを尊重し合える集団をつくる。
		各自の興味関心に応じて、部活動・国際交流・ボランティア・コンテストへの積極的な参加を促す。

A:十分達成できている。 B:ほぼ達成できている。 C:達成できているとはいえない。 D:ほとんど達成できていない。

令和2年度 京都府立南陽高等学校・附属中学校学校経営計画(スクールマネジメントプラン)

評価領域 (分掌・教科領域)	重 点 目 標	具 体 的 方 策
第3学年部	安定した生活習慣を確立し、最高学年として高い規範意識を身につけ、社会に出ていく人間としての土壌を養わせる。	自宅学習の点検を行い、日々の生活リズムや学習習慣を自己管理し、毎日の授業を大切にしてい、よりよい学校生活を送る手立てを自ら考え行動する力を身につけさせる。
		挨拶や身だしなみなど、学校全体の範となる集団作りができるよう、毎学期学年集会などを行い、さまざまな教員から語りかけることで意識を高めさせる。
	進路目標を定め、主体的な学びを継続することで、希望進路の実現に向けて全力を傾けさせる。	教科担当と担任団の連携を密にして、個々の生徒に応じた指導を行うために、毎学期1度は担任面談を行う。
		進路指導部と連携して進路に対する意識を高める取り組みを行うと共に、模試の結果を精査し、希望進路の実現に向けて細やかに生徒に対応していく。
	学校行事を通して集団を高めると共に、個々の生徒に確かな成長を実感させる。	学校祭などの行事に主体的に取り組む中で、大きなことを仲間と協力して成し遂げる充実感や、自己肯定感を感じさせて人間的成長を促す。
さまざまな行事や日々の生活を通して、互いの個性を尊重し合える豊かな集団作りをさせる。		
サイエンス リサーチ科	サイエンスの探究活動において、次年度以降の附属中学校との接続を見据え、主体的な活動としてより充実したものとすると同時に、探究内容のレベルアップを図る。	教科主任・サイエンス担当と連絡を密にとり、サイエンスの活動の充実を図る。
		大学や関西文化学術研究都市等の研究施設等との連携を図り、より深い取組の内容とする。
		探究活動の成果を研究会や学会等の外部の場で発表する。
		学年の垣根を越えた交流(報告会等)を積極的に持ち、学び合いの効果等も活用し、主体的な探究活動を後押しする。

A:十分達成できている。 B:ほぼ達成できている。 C:達成できているとはいえない。 D:ほとんど達成できていない。

令和2年度 京都府立南陽高等学校・附属中学校学校経営計画(スクールマネジメントプラン)

評価領域 (分掌・教科領域)	重 点 目 標	具 体 的 方 策
附属中学校	特色ある中高一貫教育の確立のための実践研究を行う。	超スマート社会に対応するため、学校教育の枠組みで実現できるICT活用授業を研究する。
		パナソニック教育財団に申請した実践計画『「学びのアトリエ」と「つなぐ展示」によるSTEAM教育の充実化と国際展開～学びの表現活動と多様な他者との相互鑑賞による触発の連環に向けて～』の最終年度にあたり、全校体制で推進する。年度内に最終報告会（全国大会）を開催する。
		附属中学校での教育実践を各教科内で共有し、高校の実践につなげる。
	校内や校外の人材との交流を通して、人間的な成長を促す。	文化祭や夏季実習などに積極的に取り組ませる中で、仲間意識や人格の成長を図る。
		部活動やボランティア活動への参加を促し、活動領域を広げ人間的な成長を図る。
	教育課程の充実を図るための研究を行う。	中高一貫校としての教育実践、新指導要領を踏まえ、教育課程の編成について研究を行う。
国語科	組織的な教材研究・指導法研究を行う。	I C Tの効果的な活用方法を研究し、実践する。
		言語活動を充実させ、その成果と課題を教科で共有して、より効果的な指導方法を確立する。
	希望進路の実現及び社会生活に対応できる国語力を育成する。	予習・復習の具体的内容を指示し、小テストを効果的に行って、生徒に学習習慣を確立させ、基礎知識・語彙を定着させる。
		難関大学の入試問題を研究し、生徒の進路実現につなげる。
		授業や課題を通じて、生徒に読書のおもしろさを啓発し、生徒の視野を広げる。
	中高一貫を見通した指導体制を充実させる。	生徒を多面的に評価するために評価方法を改善し、効果的な指導につなげる。
		6年間一貫性のある指導を行うため、教科で情報共有を密に行うとともに、中高を問わず、相互に授業見学を行う。

A:十分達成できている。 B:ほぼ達成できている。 C:達成できているとはいえない。 D:ほとんど達成できていない。

令和2年度 京都府立南陽高等学校・附属中学校学校経営計画(スクールマネジメントプラン)

評価領域 (分掌・教科領域)	重 点 目 標	具 体 的 方 策
地歴・公民科	主体的・対話的で深い学びを実現する。	主体的・対話的で深い学びの実践方法・評価方法について、教科内で共有する。
		総合的な探究の時間を中心とし、その他のあらゆる場面でも課題を探究する活動をいっそう充実させる。
	中高一貫を見通した指導を行い、附属中学校から高校への滑らかな接続を果たす。	担当者間・担任との連携を密にし、個々の生徒に応じた学習指導をいっそう充実させる。
		中学校と高校の連続性を念頭に置き、附属中学校の教育課程について、高校の指導内容との整理・統合を図る。
	新学習指導要領や大学新入試を踏まえた授業を行う。	新入試の傾向を各科目担当で分析し、指導内容を検討・共有する機会を学期ごとに設ける。
		ICTを活用した生徒主体の授業の実践を推進し、実践内容を検討・共有する機会を学期ごとに設ける。
数学科	個々の数学力を高める指導方法を確立する。	個に応じた学習指導を行うことで、基礎的な数学力を定着させるとともに、個々の数学力がより向上するような格調高い授業を展開する。
		希望進路に応じた課題設定を行うことで、計算力及び論理的思考力、記述力を養い、また適宜発表活動等を取り入れながら、希望進路が実現できる数学力を培う。
		日頃から担任と連携を密に取り、必要に応じて教科担当の立場で生徒と個別に面談等を行う。
	数学を楽しみ、探究する精神を育成する。	学年や実態に応じて、生徒が興味関心を持って主体的に学び合えるような教材や指導方法を教員間で共有し、実践する。
		効果的にICTを用いることで、個々の生徒の教材への理解を深め、また知的好奇心がくすぐられるような授業展開を行えるよう工夫する。
		京都・大阪数学コンテストを始めとするコンテスト及び数学検定などへの積極的な参加を呼びかけ、数学の魅力・面白さに触れる機会を増やす。
	中高一貫教育を含む指導体制の充実及び教科指導力の向上をはかる。	6年間を見通した授業の進度及び指導方法について、同じ科目を担当する教員が交流する場を週1回以上設定するとともに、新学習指導要領の学習評価について論議する。
		個々の教員が難関大学を中心とした大学別入試問題及び分野別入試問題研究を行い、その成果を教科で共有する場を適宜設定し、難関大学進学に向けた進路指導に活用する。
		数学の枠を超え、教科横断型授業を展開し、数学の必要性・有用性を生徒に実感させる。

A:十分達成できている。 B:ほぼ達成できている。 C:達成できているとはいえない。 D:ほとんど達成できていない。

令和2年度 京都府立南陽高等学校・附属中学校学校経営計画(スクールマネジメントプラン)

評価領域 (分掌・教科領域)	重 点 目 標	具 体 的 方 策
理科	個々ならびに組織的な教科指導力の向上を目指す。	6年間を見通した中高一貫教育における理科教育課程を実践し、組織的な指導体制の構築をはかる。
		サイエンスの活動や附属中学校におけるダ・ヴィンチの取組やコンテスト等への参加に加えて、高校普通科の探究活動の取り組みを通して、地域の企業や大学とつながり、興味をもって主体的・自立的に学ぶ生徒を育成する。
		科目主担当を中心にして模擬試験の結果等を分析・検討し、生徒の学力や課題を共有して学力伸長に向けた組織的な指導方法を工夫して、難関大学進学など自ら高い目標をもって挑戦する生徒を育成する。
	新学習指導要領に対応して、ICT活用の充実を図る。	個に応じた学習内容の提供及び思考力・判断力・表現力を育成するために、ICTの効果的な活用法をさぐり、各々の実践研究を教科内で共有する。
		事務部をはじめ各分掌や他教科と連携・連動して、効率的にICTを利用していく。
保健体育科	卒業後も豊かなスポーツライフを実現する資質を育てる。	自己の体力の現状を把握し、体力向上の方策を考え実践させる。
		運動の場面で、公正、協力、責任、参画に対する意欲を高める態度を養う。
		学習指導要領改訂の方向性に合わせ、生徒の実情に応じた選択制授業を実施していく。
	現代における健康課題について知識、理解を深める。	課題学習の研究の質を高め、現代における健康課題を幅広く考える視点を養う。
		薬物乱用について正しい知識を身につけ、適切な行動をとることができる態度を養う。

A:十分達成できている。 B:ほぼ達成できている。 C:達成できているとはいえない。 D:ほとんど達成できていない。

令和2年度 京都府立南陽高等学校・附属中学校学校経営計画(スクールマネジメントプラン)

評価領域 (分掌・教科領域)	重 点 目 標	具 体 的 方 策
芸術科	表現や鑑賞の学習を通して、多様な芸術についての見方・考え方・とらえ方（思考力・判断力・表現力）を学び、芸術を愛好する心情を育てる。	中学校との関連をふまえ、表現や鑑賞の基礎・基本的事項をしっかりと把握させる
		鑑賞や制作・発表を行い、多様な表現活動を通して互いに認め合う力が身につくよう支援する
	自分の言葉で作品を鑑賞・批評する力を育む。	日本の伝統的な芸術と西洋の伝統的な芸術の類似点や相違点を感じさせ、自ら表現することができる力を養う
		グループ発表・学習をおこない、言語活動の拡充を図り、自らの言葉で諸芸術を批評できる心情を育てる
	生涯にわたり芸術を愛好する心情を育む。	教員間で研究授業や互見授業週間、研修会等を通して、教授方法などを研究し、授業改善に努める
		学習者の知的好奇心を喚起させるような授業が展開できるよう努める。
		多様な芸術について理解を深めさせるため、視聴覚教具を用いて鑑賞教材を研究し、教科指導力の向上に努める
英語科	基礎学力を定着させ、希望進路の実現に向けて生徒の学力の伸長を実感させる。	学習の仕方を各学年で共通して具体的に指導し、日常的に家庭学習に取り組みせ、学年に応じた自学自習の習慣を身につけさせる。
		生徒個々のレベルと目標に応じた指導をより効果的にするために、個に応じた学習内容を提供し、個別指導を取り入れる。
		教科書準拠のオンライン教材活用について研究・実践を進める。
	英語を使って積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成する。	生徒が使える語彙指導の充実を図る。
		発音指導や音読指導を中心に聞く力を伸ばし、ある程度長さのある英文を意味のかたまりごとに理解し、速読力を伸ばす。（リスニング・リーディング）
		授業で学習した内容に対して、自分の意見を持たせ、今ある英語力を最大限に生かし、英語で書いたり、話したりする機会を充実させる。（ライティング・スピーキング）

A:十分達成できている。 B:ほぼ達成できている。 C:達成できているとはいえない。 D:ほとんど達成できていない。

令和2年度 京都府立南陽高等学校・附属中学校学校経営計画(スクールマネジメントプラン)

評価領域 (分掌・教科領域)	重 点 目 標	具 体 的 方 策
家庭科	生活の営みに係わる見方・考え方を働かせ、主体的・協働的な実践活動・体験活動を通じて、よりよい生活の実現を目指す。	家庭や地域における生活の中から問題を見出して課題を設定し、解決策を構想し、実践させる。
		家庭との協力による復習の機会や年間を通じた継続的な取り組みを生徒発信により充実させる。
		成人年齢の引き下げを意識した授業内容の充実に努める。
	中高一貫教育の円滑な実施と、6年間を見通した指導を行う。	特に中学校についての研修を深めると共に、高校についての見直しも行う。
		I C T の利活用について、効果的な学習指導のための研究・実践を行う。
		研究授業や研修会等を大切にし、授業改善に努める。
情報科	情報について科学的な見方や考え方を養い、活用できる知識や技術を身に修得させる。	情報の科学的理解と、情報の収集、分析、活用、発信等の実習を通して、問題の発見とその解決の方法を習得する。
		将来、必要とされるコンピュータリテラシーを習得させる。また、プレゼンテーション実習等を通じてコミュニケーション能力を養う。
	情報倫理を身につけ、情報社会に積極的かつ公正に参画する態度を育てる。	インターネット、SNS、電子メールや携帯電話及びスマートフォンなどの利便性と信憑性・危険性を理解、把握させる。
		著作権保護の重要性を理解させる。
	教員の指導力を向上させる。	情報に関する最先端の内容の研究と指導法の研修を継続的に行う。
		ティーム・ティーチングを有効に活用できるよう研究を行い、連携を密にする。

A:十分達成できている。 B:ほぼ達成できている。 C:達成できているとはいえない。 D:ほとんど達成できていない。